（２） 元気なキャンパスをつくり出す仕掛けの創出

－“治療”から“予防”へのパラダイム転換－

短期大学部学長代行　教授　住吉廣行

（様式１　一部）

プログラムの名称（全角 20 字以内）	元気なキャンパスをつくり出す仕掛けの創出		
	副題（サブタイトル） －“治療”から“予防”へのパラダイム転換－		
キーワード（5 つ以内）	元気なキャンパス	学生参画	武者修行
	ＳＤ活動	“予防”的対応	
プログラムの概要（400 字以内）	経済、精神、勉学面など最近の学生が抱える問題は多い。本学も入学前から卒業までの一貫した学生支援システムを構築し、手厚く対応している。 しかし、現に生じている問題への“治療”的対応だけでは追いつかず、根源的な解決策としての“予防”的対応強化の必要性を感じていた。これまでの萌芽的試みに対し、理論的な裏付けを行い、もっと自信を持って推進したいとの考えが本申請の背景にある。 大学運営への学生参画で、元気なキャンパスという雰囲気を醸し出し、その中で学生が自力で自らの課題を解決する仕組みを創出したい。 そのため、①学生を側面支援する職員のＳＤ活動、②教職員の連携強化を図る。③湘北短大との相互点検・評価に付随した学生間交流での武者修行、④大学と一体となって進める社会体験活動で、コミュニケーション、プレゼンテーション能力等の社会的スキルを涵養する。こうした人材の地元定着は、地域の地盤沈下防止に役立つであろう。		

取組に当たって

昨年度はＦＤ活動への学生参画（具体的には学友会活動の中に学生ＦＤ委員会を設置）をテーマに申請したが、残念な結果に終わってしまっている。今回の申請では、一方では教職員側のＦＤ・ＳＤ活動を強化し、学生に対する意識変革とともに、教職員間の連携も深めて学内の教育力・学生支援の力を高めようと考えている。他方、変化した教職員が醸し出す人的環境を利用して、学生が多様な取組（ここでは具体策として、①マツナビを通じた高校生等へのガイド役、②１年生へのピアサポートを含む情報センター支援、③１年生の就職活動支援、④新入生オリエンテーションでのファシリテータ役、⑤ゴミリサイクル推進活動など、大学運営を考える機会が豊富な取組を想定している）に積極的に参画したり、地域社会・他大学への武者修行や交流等を通して、社会的にも大いに成長し短期大学のキャンパスそのものを「元気で明るさに満ちた雰囲気」に変えてしまおうと目論んでいる。　前回の申請に比べその内容は、「キャンパスに滞在するだけで、どんな学生でも溌剌としてくるような、つまり病気になってから“治療”するのではなく、病気にならない“予防”対策を講じようする取組」へと模様替えしている。しかし、「学生、教職員が一体となってこそ短期大学が良くなるのだ」というコンセプトは、基本的に変わっていない。

（様式２）

２　学生支援に対する現在の基本的考え方等について【５ページ以内】

(1) 学生支援に対する理念や目標について［申請書作成・記入要領Ｐ３参照］

学生の支援を考えるにはまず、①入学してくる学生が現在どのような状況におかれているのかを分析する。次に、②どのような原因でそうした状況になっているのかを多角的に追求する。また、③周囲の環境や社会的状況が、どういった形で学生の「こころ」や「行動様式」に影響を与え、現象として具体的に表れているのかを、表面的な部分だけではなく、背景まで含めて良く見る。こうした姿勢が重要で、学生に対応する教職員の「青年心理の理解」「応接技術」面での能力アップや「社会状況を洞察する力」が必要になり、ＦＤ・ＳＤ活動等として展開される必然性があるのです（３（１）（ａ）の図３も参照）。

（ａ）学生支援の目的

本学では、このような認識の下で、学生のニーズをとらえた数々の、学生生活を支援する取組を行ってきています（３（２）参照）。学生に必要とされる内容（教員サイドからの視点）、或いは学生の要求（学生サイドからの視点）は、多方面に渡っています。その目的は、学生と教員とでは異なるように見えても、若者が社会へ出るためにどうしても通過しなければいけないプロセス、つまり自分自身で判断し、計画を立て、責任を持って実行していくという当たり前のプロセスを完遂させる力をつけることに行き着くのです。

こうした未完成な部分を多く持つ学生に、①資格取得などで仕事遂行能力を示せる、②社会人として必要な教養・社会性の獲得、③周りの異なる世代の方々とコミュニケーションを行って意思疎通を図り、④相互に理解しながら協力して一つの仕事を完成する、このような**社会人として当然の資質を付加価値として身に付けさせたい**。①が必要条件とすれば、②～④は十分条件に対応します。こうした必要かつ十分な条件を学生に備えさせる。これが、本学が学生支援を全学あげて行う目的となっています。

（ｂ）学生支援に対する理念　－CS（顧客満足）から協働（学生参画）へ－

（ア）現状認識

本学をはじめ多くの大学では、学生に対してこれでもかというほど多くの施策を行っているように思えます。しかも「未だ満足できないなら、これも」という方向でサービスをエスカレートさせているのではないでしょうか。こうした事態は、学生は２年間で短大を通過していくカスタマーで、一方的にサービスを受けるだけの存在とする見方に起因していると思われます。大学が持っている多くの機能を駆使し、お客様の満足度（CS)をできる限り上げることによって、学生が育っていたと思い込んでいる節があるのではないでしょうか。しかし、文部科学省をはじめ社会の反応は、今も多様なＧＰの獲得を競わせており、「もっと根本的な対応が必要」だと暗黙のうちに指摘しているように思えます。

（イ）大学運営への学生参画　－カスタマーからコラボレーターへ－

そこで本学では、これまでの「CSの上昇」のみを追求する姿勢を改め、学生を大学運営のカスタマーからコラボレーターへと、認識を変化させようと考えています。教職員と共同で大学運営の一翼を担うとなれば、責任が伴うだけでなく、「本当に実現したい自分達の要求とは一体何だったのか」についても考えることになるからです。

例えば授業改善を考えてみましょう。これまでの本学のＦＤ活動では、アンケートをとって集計し、教員が対応を考えることに終始していたきらいがあります。これからは、「教員の情熱と学生の意欲のないところで、良い授業は成立しない」という、冷厳な真実を素直に受け入れ、**学生にも責任の一翼を担わせ、自ら意欲を醸成**しなければ、学生の「良い授業を受けたい」という望みも叶わないと主張し、その方向で支援しようと考えるのです。

（ウ）身に付く社会性　－学生参画のもう一つのねらい－

大学は比較的同質性を保ってはいますが、一つの社会ですので、学生がその運営に参画することで、一般社会へ出るために必要な種々の能力を獲得する訓練の場になると考えられます。①自らの置かれている立場を客観的に見る、②課題解決に必要な手立てを多くの学生の意向を汲み上げながら考える、③教職員等とコミュニケーションができる、④決めた事は責任を持って実行する、⑤成功度をチェックし次に備える、等を日常の学生生活の中で体得できる可能性があります。可能性を現実に変えるには、学生に対応する教職員の許容量が大きいことが前提となりますので、活発なＳＤ・ＦＤ活動が必要になります。

(2) 学生支援に対する現在の取組の組織性について［申請書作成・記入要領Ｐ３参照］

（ａ）トータルな学生支援システムの構築　－現在の支援状況－

現在の本学の学生支援は、社会の複雑さを反映して、学生の抱える問題に応じ多岐に渡っていますが、それぞれに木目細かく取り組まれています。①勉学活動等の関係では教務委員会、②自主的活動を含む学生生活関係では学生委員会、③就職活動関係ではキャリアセンターの教職員が対応しています。事務側ではこれら３部門を統括した学生センター長を今年度から配置し、横の連携を図ろうとしています。また教員側では、全学必修のゼミ担当教員が組織の要になり（図１参照）、伝統的に痒いところに手が届く学生支援体制が出来ています。その結果は、**退学率の低さ**（楽しく学べる環境と学生・教職員間の距離の近さからくる気軽な相談体制）、**就職率の高さ**（指導の充実・学習の成果と社会性の涵養）、**好調な学生募集**（魅力あるカリキュラム等）等の指標に顕著に表れています。

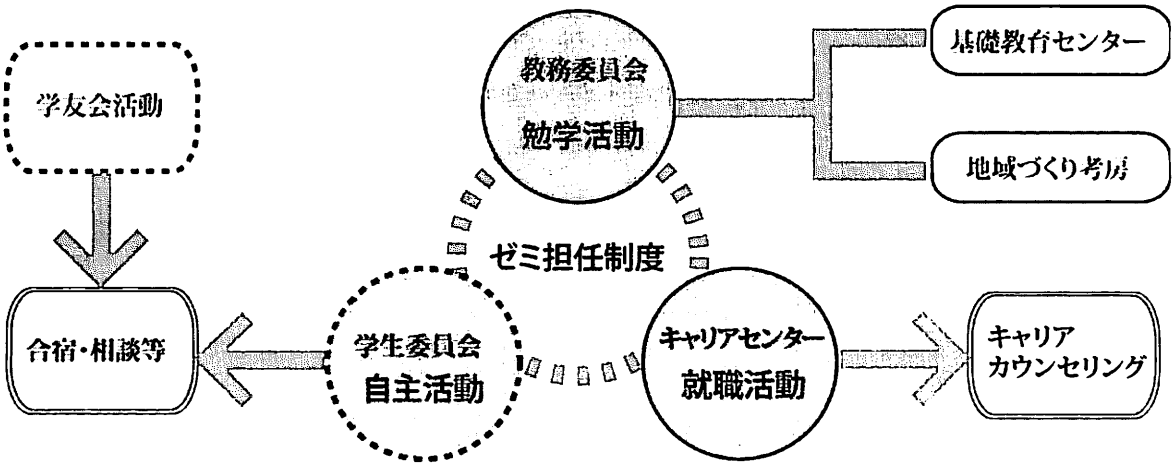


図１．ゼミナールを中心に組織化された学生支援体制

（ｂ）学友会の組織活動を支援する体制

学生が社会性をなかなか持てない中で、本学では**学友会活動の活性化を重視**しています。学友会では、全学生を対象として、独自の財源も持ちつつ、自分達で予算的裏づけを持った計画を立て、それを着実に実行していきます。学園での小さいといえども社会生活を学生が運営するのですから、コミュニケーション能力、自己表現力と説明能力、他者への共感・理解など、現在の学生に不足していると思われている様々な能力が要求されます。つまりそこは、学生の社会性が涵養される場として、教育的にも軽視できないフィールドとなるのです。このような認識が共有されているため、学友会活動を軸とした学生支援は、全学教職員挙げての組織だった本格的なものになっています。

学友会の組織的な活動を遂行するには、ゼミやサークルを基礎単位として意見を汲み上げ、異なる意見、日程、財源を調整しながらの粘り強さが必要です。**擬似社会体験としての学友会運営**は、自分の思い通りにはならない経験、他者と意思疎通を図る必要性、学外の団体との交渉・折衝等、

ストレスを感じながらの生きた社会経験を積む場となります。

学友会活動を教職員が、学生委員、ゼミ担当、クラブ活動顧問などいろいろな立場から側面支援する中で、学生との信頼関係に基づき意見を交わすことができる雰囲気が作り出されており、学生からの本音の情報を得られる場となっている点は重要です。次のステップは、これらの情報を何らかの形で教職員が共有できるようにすることが課題となります。

(3) 社会的ニーズや学生のニーズへの対応の現状について

［申請書作成・記入要領Ｐ３参照］

（ａ）社会的ニーズと大学のニーズとの融合

本学では、地域社会との連携を取り入れた帰納的教育手法を駆使していますが、この取組は第一回の特色GPに採択されています。この取組自体は、学生の学びの動機付け、学習意欲の向上を目指して行っているものです。しかし地域の側から見ると、高齢化が進行する社会にあって、若者の参加が必要とされる場面が増えているので、地域に賑やかさを取り戻すなど**地域活性化への重要な貢献**となっています。

学生の学びの視点で考えてみると、学内での理論的な講義だけでは理解が難しい場合でも、学外へ出て現場の実態を経験する中で、課題や問題点が見えてきます。さらに、教室で学んでいることが実社会ではどのように展開しているかが直接見えるので、学生にはこの手法は好感を持って受け入れられています。インターンシップはその場が企業ということになりますが、本学の場合は地域社会全体を学びの場と捉えているのです。

（ｂ）学生のニーズの実現のために

また社会的には、孤独化が進む中でも、学生はそれを乗り越えて仲間と共に楽しみながら大学生活を送りたいと望んでいます。また教職員からも専門分野の知見だけではなく、社会人の先輩として、これからの社会生活を送る上でよきアドバイスを得たいと考えているでしょう。これが本学教職員の底流に流れる学生への認識であり、**学生の立場に立って支援できる源泉**となっています。そういった学生のニーズ（彼等の意識が顕在化しているかどうかには依らない）を実現するために、例えば学生委員会では、学友会の年間活動方針案作りやそれを財政的に裏付ける予算案の作成への支援をしています。教職員は、そのこと自体を委員会の任務と位置付け、他の教職員と協力して組織的な対応をしています。

（ｃ）他大学との交流

これまでは本学内での学生の取組支援について述べてきましたが、異なる大学の学生との交流も重要な意味を持ってきます。特に地方の大学ではキャンパスが少し離れている場合が多く、交流には努力が必要です。長野県内の大学・短大・専門学校などを対象とした「虹色フェスティバル」（本学学生の発案で実現し現在も継続中）や県内私立短大体育大会（短大間連携）の他に、相互点検・評価校である湘北短大との交流も継続的になされており（図２参照）、こうした取組へも大学側から多様な支援がなされています。多様な交流を通じて、学生は楽しみながら成長のステップを踏んでいると感じています。

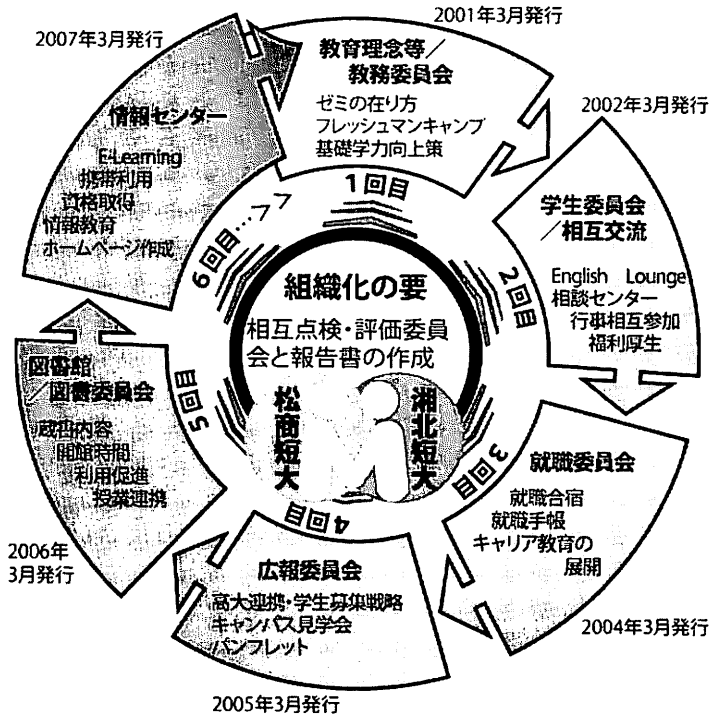


図２．湘北短期大学との相互点検・評価活動の経過

(4) 現在の学生支援を行う教職員の資質向上（ファカルティ・ディベロップメント（ＦＤ）、スタッフ・ディベロップメント（ＳＤ）など）について［申請書作成・記入要領Ｐ４参照］

（ａ）学生支援の重要性を教職員の共通認識に

大学での教員の任務は、**教育・研究、社会貢献、大学運営という３本柱**からなると、本学では定義しています。その中の教育活動では、優れた授業を行う他に、学生生活を様々な面から支援する事も含まれます。全専任教員は必修のゼミを担当しており、専門分野の教育については独自性が発揮されますが、それ以外の点では歩調を合わせて進めています。どの教員も例外なく学生対応しているという意味では、組織的取組となっています。

このような姿勢を大学が採っていることから**「教職員と学生との距離が近く、面倒見の良いしかも就職に強い短大」**として、地域社会からの熱い視線を受けてきています。新しく入って来る教職員に対しても、このような姿勢が重要なのだという意識を持ってもらえることが、第一の資質向上策となります。これは、本学教職員の日常的に発する言葉や振舞いを、新入教職員が観察することで、徐々に周囲に浸透していっていると思われます。

（ｂ）教職員の能力アップへの取組（特にＳＤについて）

各部署において求められる職員像を鮮明にしつつ、研修会に派遣しその能力アップを図っています。新入職員には、新入生と一緒にガイダンスに出席するよう促し、仕事内容を理解させています。就職・学生相談等、学生との対応を主とする職員には、カウンセリングやコーチングスキルさらにはＥＱＪ公認プロファイラ等の資格取得を支援しています。

毎日の朝礼で、当日の行事日程の確認は当然ですが、一日一人のペースでテーマ自由の３分間スピーチを課し、短時間で的確に話せる訓練を実施しています。月一度の全職員参加の定例職員会議を開き（必要に応じ課長会議も実施）、不十分ながら職員間の横の連携を深めようとしており、本学教員の動きや全国の大学の状況なども学ぶようにしています。

（ｃ）ＦＤについて

ＦＤ委員会、全学ＦＤ委員会を設け、授業評価のほかに学内外の優れた実践を学ぶ学習会も開催しています。年に一度は合宿形式での、学部横断的な全学意見交換会も実施されています。「わか

りやすい授業を目指して」というＦＤ活動報告書（短大版）も出版しています。しかし形式的な要件は満足させても、改善するか否か、出来るか否かなどは、最終的には教員本人の自覚的な取り組みに任されており、問題を指摘された教員に対して助言を与えられるような専門家がおかれているのではありません。教員自身のプライドもあり、教職員間でのフランクな話し合いが持てるかどうかが鍵であり、教職員の誰もが気が付かない鋭い指摘は、当の学生に語ってもらうことが重要な要素になると認識しています。

(5) 現在の取組の実施後の評価及び取組内容の改善について

［申請書作成・記入要領 P4参照］

（ａ）評価を広く世に仰ぐ姿勢と指標の設定

学生支援活動の評価は、年間活動の総括的文書を、文字通り毎年「アニュアルレポート」としてまとめ、学内外の目に触れるようにしています。地域総合研究という雑誌に掲載し、公刊されるので、大学関係者等にはいつでも公開されています。この意味では全国的に評価を仰ぐ姿勢を示しているとも言えます。公表内容は、教員の任務である３本柱の全ての活動内容やそれをサポートする各種委員会の実績など、大学システムのあり方全般に渡っており、自己点検・評価報告書の基本となっています。例えば学生委員会関係では、クラブ活動の遠征やそれへの指導者の引率などの経過も詳細に報告され、成績を含む成果についても分かるようになっています。また、キャリアセンターや学生委員会の学生支援活動およびゼミナールを中心とした担任制度等は、長い歴史と経験を経てきていますが、これらは就職率の高さ(>95%)や退学率の低さ(<2%)、それに入学生の安定的確保などという指標で見ても、十分な成果をあげてきていると評価できます。

（ｂ）十分な成果が得られていない取組と改善の工夫

本学の比較的新しいシステムに、学生に基礎学力をつけることを目的とした「基礎教育センター」がありますが、利用学生数が思ったほどは伸びていないという問題があります。学生が３名の担当教員と接するのは「社会教養」という基礎学力を伸ばし就職試験に対応できるようにと設けられた必修授業の他は、教養系の選択科目に限られるところに問題があるのかもしれません。そこで、本学学生の実力に見合った、自習用の問題も織り込んだテキストを創ることを奨励し、それを用いて少なくとも月二回はセンターへ行き、質問・懇談することを課して、教員とのコミュニケーションを図れる工夫も考えています。

また担当部署毎の職員のスキルアップは心掛けていますが、情報の共有など全職員間での横の連携が今一つでした。今年度から学生センター長を配置しその強化を図ろうとしていますが、ＳＤ活動などを通して全職員の能力アップが求められていると自覚しています。

（様式３）

３　学生支援に対する現在の基本的な取組の状況について【５ページ以内】

［申請書作成・記入要領Ｐ４参照］

（１）現在の取組の状況　－入学から卒業までを通じた総合的視点で－

（ａ）総合的な学生支援の取組

本学学生は、置かれている社会状況に意識的であろうと無意識であろうと影響を受けた結果、さまざまな困難な問題を現在抱えています。そのような現代的課題に対して、有効に働くと思われる対策を講じるべく、総合的な学生支援活動を展開しています（図３）。

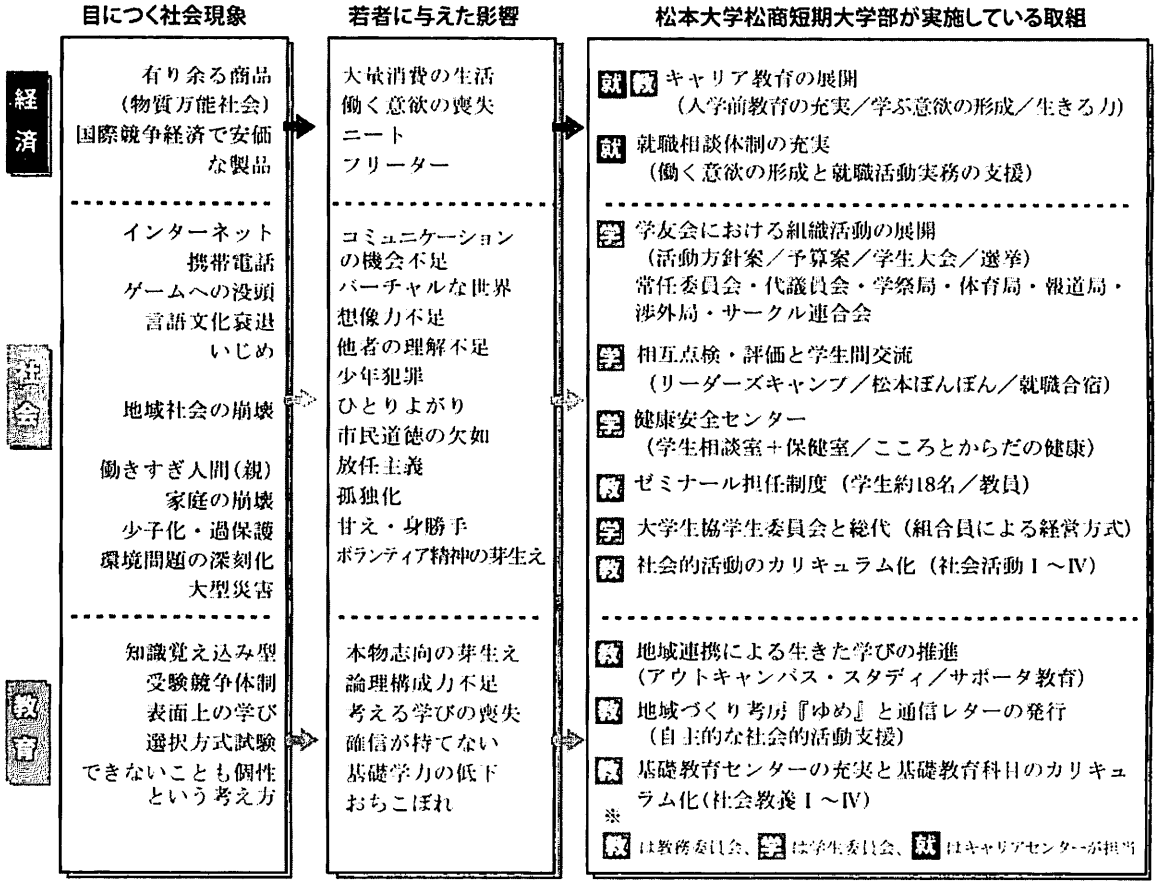


図３．本学の学生支援の取組とその背景

教務委員会、学生委員会、キャリアセンターなど、大学側の各種委員会が取り組む活動は、全て学生の自主性を育み、対話力（コミュニケーション、プレゼンテーション能力）、判断力、協調性、市民道徳の育成等、社会性の涵養を目指す方向に収斂しています。

（ｂ）時系列で見た学生支援の取組とその構成

前図３で見た本学の総合的な学生支援の取組は、学生参画を重視するという大学側の基本姿勢に基づいて、入学前から卒業までの時系列でどのように構成されているのかを、図４で概観しています。より具体的な支援内容とその流れは、後掲の資料１にも詳細に示されています（図４と資料１参照）。

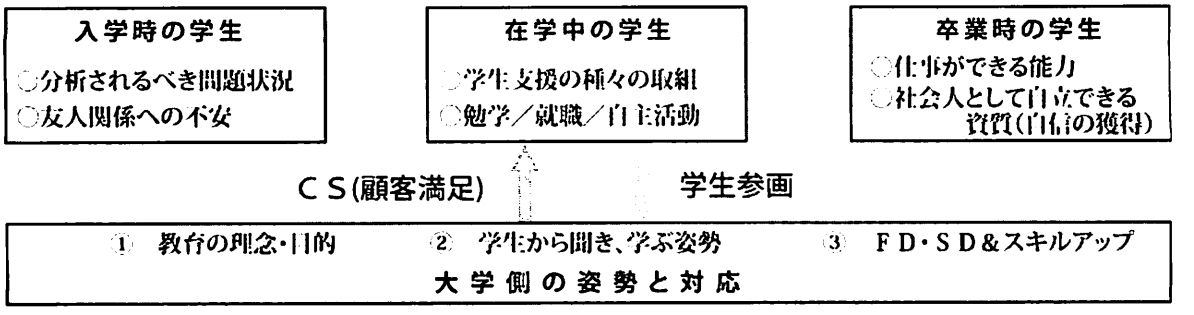


図４．学生支援に対する松商短大部の考え方と時系列で見た概要（詳細は資料１の図参照）

（２）現在の取組の連携状況　－総合的・体系的取組の視点－

（ａ）取組項目ごとの支援状況とその体系

（ア）修学支援 教

本学はフィールド・ユニット制度という、多様な分野の中から学生の好みに応じて選択できる学習システムを採っています。適切な指導がないと、学生はあれこれ目移りして、系統的な履修ができなくなる可能性があります。そこで、キャリアセンターとも連携し、学生夫々の将来の進路を確かめながら、入学前からオリエンテーションを実施しています。

基礎学力の養成は就職試験対策にもなりますが、社会教養Ⅰ～Ⅳという科目では、国、数、英、社と時事問題、必要な学生には理科も用意し、全学生が学べます。同時に基礎教育センターを開設し、現在は常時３名の専任教員が学生の質問に答えています。センターでは、本学学生に合わせたテキストの開発も手がけています。他にも「新聞を読む」「文章表現」等の科目で、時事問題への関心や、文字での表現能力を高めるための対策も行っています。

キャリアカウンセリングにおける在学生の経験談も、入学予定者には大いに参考になっています（資料２）。入学後もゼミ担任制度（図１）を利用し、学生一人一人の相談に応じています。さらに、入学式の翌日から実施される新入生合宿では、教務委員会からの丁寧な履修ガイダンスが行われます。本学では各種委員会、ゼミ担任、在学生など**何重にも仕組まれた支援システムを構築**して対応しています。入学後も出欠調査を行い、ゼミ担任と連携をとりながら、欠席が少しでも目立つ学生の情報を共有し、適切な対応をとっています。

（イ）健康支援・メンタルヘルス支援 学

県医師会の紹介で、大学近隣の医師を指定していただき、学校医登録をしています。学生の健康診断や昨今のはしかのような場合にも、相談に応じていただける体制ができています。学内にも医師や看護士の資格を持つ教員が複数おり、通常の対応には困りません。また松本市は緊急医療体制も整っており、現在のところ特段の心配はありません。

健康安全センター（保健室、なんでも相談室から構成）をようやく設立し、風邪や腹痛、軽い怪我などには適宜対応しています。少し重い症状には前述の学校医や近隣病院との契約に基づく提携を活用しています。またなんでも相談室では、精神保健福祉士や医療ソーシャルワーカーの資格を持つ教員と連携し、学生のメンタル面での相談に当たっています。

（ウ）就職支援 就・学

就職委員会と教務委員会との連携も進み、就職指導が時間割上に配置されています。就職活動を支援するのは主にキャリアセンターの役割です。学生を社会へ送り出すには、社会常識・一般教養だけでなく入社試験対策も必要になります。さらにその前提として、各学生が自らの人生をどのように設計するかを考えるプロセスを経る必要があります。このため学生全員を対象に、キャリアカウンセリングを入学前に一度、就職活動が最盛期を迎える直前の1年次の春休みを利用して二度目を、各回一人約一時間かけて丁寧に行います。これまでの経験等を振り返り、興味や適性をもとに、

将来の可能性を探るという作業を集中してやり遂げます。学外から招いた約20名のカウンセラーがそれに当たっています。

職業の実態を知ろうと、企業の方を招いての就職講演会や、OB・OG、就職先が決まった先輩の経験談を聞く会（資料３）も含め、具体的イメージが湧く企画も用意しています。

（エ）経済的支援 教・学

バブル崩壊以降、倒産、リストラなどで勉学を続けるには経済的に困難を抱える家庭が増加してきました。そこで、平成13年度から、経済的理由を指標とする特待生入試を実施しています。志願者数の増加に伴い、「授業料全額免除のⅠ種」の他に「半額免除のⅡ種」も設け、できるだけ多くの学生が入学し易くなる措置を講じています。また、同窓会の支援により、授業料を就職後に返還する（無利子）ことが前提の貸出制度も作っています。これに旧来からの育英奨学金を含めて、本学の経済的支援のシステムが構成されています。

また勉学意欲を高め奨励する意味で、学生が各種資格取得に成功した場合に、表彰し受験料に見合った支援金を支給しています。これは後援会（保護者会）のご理解を得て、その会費からの支出をお願いしています。この制度で７年経過し、資格取得に挑戦する学生数は上昇を続け、合格者数も増加しており、良い教育効果に保護者からも喜ばれています。

（オ）課外活動支援 教・学

課外活動の支援については、本学は長年の実績を誇り、その取組は論文でも紹介されています。学友会活動の支援は別に紹介しますので、ここではそれ以外について述べます。

まず、学生が自身でプランを立て、地域社会と連携して様々な取り組みを行うことを奨励するために、地域づくり考房『ゆめ』を開設しました。専任教員と非常勤職員が常駐し、地域社会からの要請に応えて学生が地域住民と話し合います。教職員はアドバイザー役を果たします。これとは別に学生が独自に考えた地域連携事業を公募し、「優秀で且つ実現可能性があり、興味深い内容」を選定し、上限５万円程度の支援をする制度も創りました。

他大学との交流活動に対する支援も行っています。クラブ活動には規定を設け、一定水準以上の大会への出場については、適当な補助を行うようにしています。また国公立を含む長野県内の大学・短大・専門学校が集まり交流する「虹色フェスティバル」が、毎年本学を会場に行われ今年７回目を迎えます。長野県内私立短大合同の体育大会が秋に開催され、すでに１３回を数えています。もちろん全国大会への参加も奨励されています。また、短大同士で行っている相互点検・評価活動の一環としての、湘北短大生との学生間交流も行われています。こうした活動にはどうしても移動が付いて回るので、大学所有のバスを出すなどして、大いに奨励しています。

同窓会では、学生の自主的活動で、特に顕著な実績を挙げた学生達を卒業時に表彰する制度が設けられ、これを「同窓会賞」と呼んでいます。この賞も励みになり、学生の活動はかなり活発に展開されています。しかしその大元には学生委員会による、学友会執行部への、粘り強くかつ節度をわきまえた抑制的な支援活動があります。このような支援の仕方については、教員側の微妙な心遣いが決定的要因になる可能性があり、配慮が必要です。

（カ）学生生活上の支援 総務

大学生活協同組合との連携を強めており、下宿は殆ど全ての学生が生協を通して決めています。消費者被害対策は、学生委員会主催で地元の弁護士等を招き、被害の実態や程度、対策法など現場感覚のリアリティ溢れる講話をしていただいています。また、免許を取得したばかりの学生も多く、警察署の協力を仰ぎ、安全運転の講習会も開催しています。

後援会の協力で、安価なものですが、全学生が保険に加入するようになっており、クラブ活動はもとより、通学途中やアウトキャンパスでの実習時における怪我などに対応できるようになっています。

（キ）留学生への支援 国際

留学生の数は、各学年数名程度で、割合で見ても２％弱でしかありません。四大とも共通の国際交流センターが開設され、留学生支援を行っています。困ったときは、ゼミ担当または国際交流センター職員というように、留学生の心のよりどころとなっています。

日本人学生が留学生と話そうとしない（あるいは恥ずかしがって話せない）という問題もあったので、留学生をアシスタントとするハングル語や中国語講座を設定し、その中で交流の場が出来るように試みています。また近隣には観光地も多く、ハングル・中国語版のパンフレットも必要です。留学生の母国語でのホームページ作成等で地域社会に協力していますが、彼らの側から見ると日本文化や日本語の生きた学習の機会となっています。

さらに留学生向けのスキー研修会を催し、他大学の留学生と交流する機会も増やしています。「留学生会」を立ち上げ、その自主的活動も支援しています。

留学生への経済的支援を目的とした各種取組にも参加を促しています。中でも地元ロータリークラブが主催する日本語スピーチコンテストには例年参加しており、地元ＣＡＴＶの放映もある中で、奨学金を副賞とする最優秀賞を獲得するまでに至っています。

（ク）障害のある学生への支援 学

本学ではユニバーサルデザイン（ＵＤ）という考えを取り入れようとしていますが、古い建物は、ＵＤどころかバリアフリーにも対応できていない箇所が多くあります。新館での工夫を利用して何とか対応しているのが実情です。しかし、福祉の心や人を思いやる心の育成には力を入れており、障害を持っている学生に付き添いながら面倒を見る学生が、いつでも出現できる雰囲気づくり、つまり「こころのＵＤ化」を心掛けています。

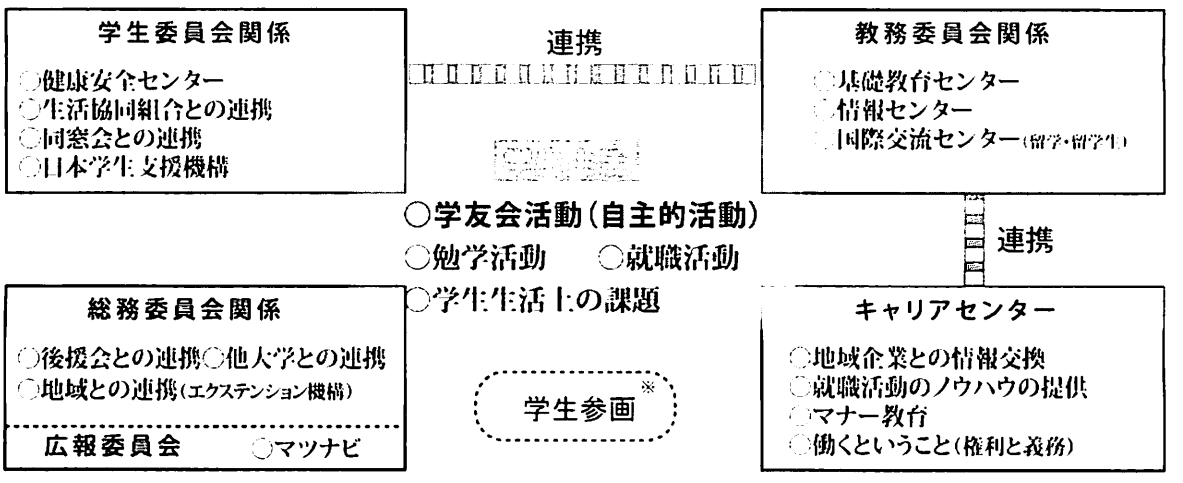


図５．学生生活の課題と対応する委員会中心の大学組織　※は今後の課題

これまでさまざまな項目について、それぞれの具体的支援内容を紹介してきました。ここで、これらの支援活動の委員会を中心とした体系について、図５にまとめておきます。

（ｂ）学友会の組織的活動への学生委員会の支援体制

学生を代表する自治組織である学友会は、図６に示す強固な組織体制を持っています。全学生が所属するゼミを基盤に局員が選出され、その互選で各局の代表委員（常任委員となる）が選出されます。各局が担当する内容は毎年改善が加えられ進化しています。これとは別に全学選挙で常任委員会四役８名が選出され、全学生の１割弱に相当する総勢40名弱の常任委員会という執行部を構成しています。この中にはサークルを基盤として選出された部長や会計等から構成されるサークル連合会があり、ここから３名の役員（常任委員）も入っています。

はずです。単なる客なら、大学に個人的不満をぶつけるか逃避するだけで、必ずしも建設的方向へ向うとは限りません。逆に自分が学ぶ大学を良くしたいと思っていることに信頼を置けば、大学を創り上げるプロセスに前向きに参画することが期待できます。

学生の参画を得つつ、教職員側でも努力して、キャンパス内に明るく元気な雰囲気を創り出す。その中で学生は教職員からの支援も得て、現代の学生が抱える諸課題（意識しているか否かは問題ではない）の克服に**「知らず知らずのうちに立ち向かっている」**、このような形態が**私たちの考える“予防”的対応**ということになります（図８及び３（ｂ）参照）。

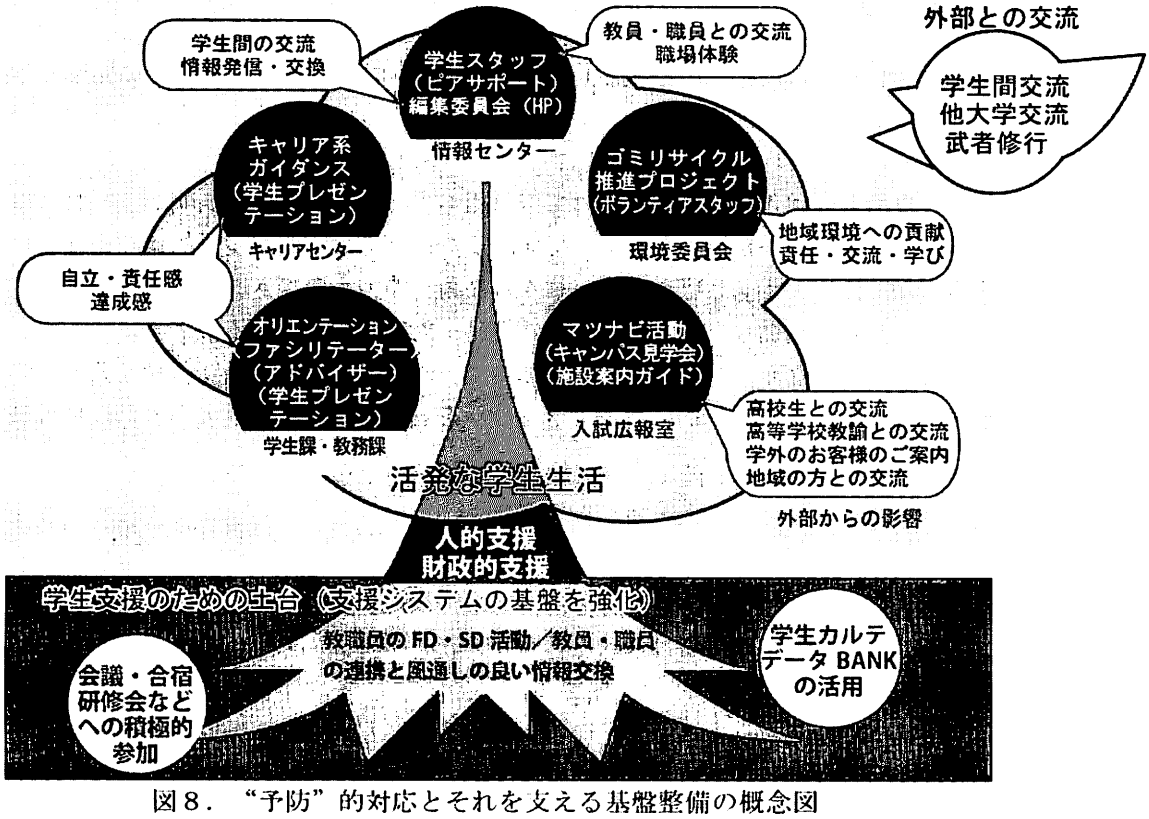


図８．“予防”的対応とそれを支える基盤整備の概念図

（ａ）職員のスキルアップと相互連携

この試みが成功裏に進むには、職員が集団として協力して対応できるための工夫が必要です。そのためにも、学生の置かれた状況、各部署が把握している情報等が共有されている必要があり、事務職員間の緊密な連携が欠かせません。また、学生への対応の仕方についても、青年期の多感な相手ですので、繊細さや高度な対応スキルも要求されます。

（ア）スキルアップした職員集団の育成（ＳＤの強化）

職員は日常的に学生対応の窓口となることから、青年期心理の理解や言葉遣いなどにも配慮できるように、ＳＤ活動の旺盛な展開は必須で、①全職員がファシリテータ、カウンセラー、ＥＱＪ公認プロファイラ等有効と思われる資格を取得するのを支援します。さらに②芸能界を含む多彩な分野のプロを招いての、対人関係のスキルアップ講習会も意義があるでしょう。また③大学教育の現代的課題についての学習も重要で、各種研修会等へも積極的に派遣します。このような職員の学生対応力向上施策の実施で、元気な活気溢れるキャンパスづくりの基礎が出来ると考えています（図８参照）。

（イ）教職員間の連携強化と学生カルテ・データ BANK 情報システムの構築

現在行われている月例の職員会議や適宜開催されている課長会議の継続は当然ですが、本学が現在どのような課題を抱え、それにどのように対応しようとしているのか等を、継続的かつ機敏に把握できる仕組みを作り上げることが重要になります。そのための職員合宿を長期休暇中に開催します。時には本学教員を講師とする講演会も開くなど、職員といえども教員の目線で本学学生の日常生活をとらえることが出来るようにします。

また学生個々人について、「気になる情報は誰でも書き込める」が、「参照は許可を受けた者に限られる」**学生カルテ・データ BANK 情報システム**（図９）を開発・導入します。「必要な場合管理者の許可を得て、学生指導に役立つ情報を入手できる」ようにします。様々な持ち場で得られた多様な情報があるので、例えば誰か個人の考えに基づく偏った情報一色とはならず、学生は多くの目線で見守られているという安心感が存在するでしょう。

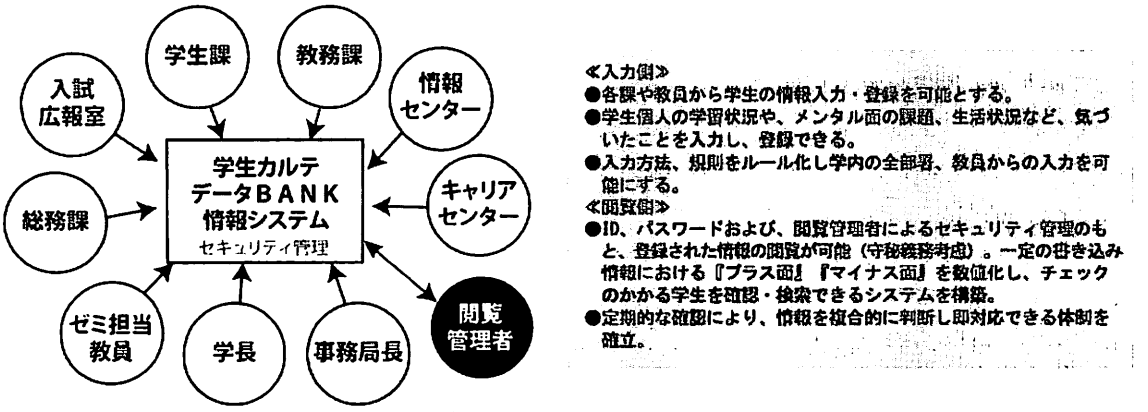


図９．学生カルテ・データBANK情報システムの構築

（ｂ）学生が関与できる場面を広げ、取組の中で成長を促す

（ア）武者修行で自分磨き

学生に負荷を感じさせる上で**武者修行による他流試合**は有効です。学生には、異なる環境で大学生活を送る方々が何をどう考えているのかを知る場、自らを客観視できる場になります。教職員側では場を学生に提供するための準備が必要です。このような目で見ると、**相互点検・評価を行っている湘北短大との良好な関係**は絶好の機会を提供してくれます。学生の成長を願い、相互交流をこれまで以上に深めることで両短大は合意できています。

（イ）学生の意欲を引き出す活動で元気を創出する

大学運営の様々な局面に参画する事で、学生は自らの大学生活を見直す契機になると思います。学生の能動的な姿勢に溢れたキャンパスは、そこにいるだけで悩みも吹っ飛んでしまうほど、明るく元気に満ちているはずです。**学生が伸び伸び出来るこのような環境をどこまで創れるか、教職員の腕の見せ所**だと思っています。

(3) 新たな取組の有効性（効果）［申請書・作成記入要領Ｐ４参照］

（ａ）取組の有効性や効果を判断する指標

本取組により、コミュニケーション力を付け客観的かつ冷静に判断すること、相手の立場からも物事を見ること、教職員と一緒になって相互に理解しながらよりよい大学生活を創り上げていくこと、等が出来れば、大学にとってはもちろん当の学生も大きな糧を得るので効果満点だと言えます。「学生に実力と自信を育む」という教育目標を達成できたかどうかという視点で見れば、この取組が軌道に乗れば“病んだ状態”への移行を“予防”出来る可能性があるので、その効果は計り知れない程大きいと思っています。

（b）現在の学生支援との関連　―社会的ニーズ、学生ニーズとの対応―

これから行おうとする事例の多くは、不十分ながらも現在実施されている内容です。しかし、この既存の取組でさえ、教職員側が**「大学運営に学生の意志を取り入れる」という意識を持つ**だけで、その内容や展開の仕方に大きな変化が出てくると思います（図８）。

（ｉ）広報活動への学生参画（マツナビ）　－入学前教育を兼ねて－

今やどの大学も、高校教員、高校生や保護者を対象に、学生募集説明会を催しています。学園生活や教育内容は、教員より学生の意見を聞く方が高校生等にとっては現実感があり、理解できるでしょう。こうした理由から、在学生が中心的役割を果たす場合が多く、本学もマツナビと称する学生集団を構成し、その任務を引き受けてもらっています（資料４）。

本学の場合はこれを単なるナビゲータとはとらえず、本学の長所や欠点を発見し、学生の目からそれをどう改善するかを提案してもらう場になると考えています。学生も大学の良さを再発見し、当事者意識から「こんなことでは、どの学生も満足できない」等と、指摘してくれれば最適のＦＤ活動にもなります。

（ii）就職活動の経験を後輩に紹介する

１年次の春休み、すぐに始まる就職活動がどんなものか不安を抱きつつ、準備に余念のない状況にあります。この時期に、ＯＢ・ＯＧの就職活動の体験談や就職後に「学生時代にやっておいて良かったこと、やっておけば良かったと思うこと」等を話してもらいます。卒業する２年生からも、一年前の状況を生々しく語ってもらいます（資料３）。ここでも、本学では単なる経験交流会に止めません。先輩達もこのような話をすると決まった時点で、自分なりにまとめ準備をします。その過程で、本学の就職指導の良かった点や改善すべき点も見えて、それをキャリアセンター職員に伝えてくれています。ここにも学生と教職員が協働で、大学の学生支援システムを改善していくという流れの萌芽が見て取れます。

学生の声に依拠すれば意味のある改善へと結び付けられるでしょう。こうした経験を継承すべく、卒業生まで対象を広げて体験談を書物へとまとめようと考えています。

（iii）情報センター・学生スタッフ

学生が大学運営に関わるという点では、情報センターでの技術指導員的な役割があります。特に年輩の教職員からの質問や要請に応え、インストラクタや作業員的役割もこなせるまでに育っています。地域社会の老人を対象としたコンピュータ講座等でも、学生は参加者から好評を博しているので、系統的な参画の場としての位置づけをしていきたい。

本学のホームページを充実させる点でも、学生スタッフと共同での編集を考えています。

（iv）新歓・オリエンテーションと先輩ファシリテータ・アドバイザー

本学では入学前からキャリアカウンセリングを行い、グループ・ディスカッションなども実施しています。ここではファシリテータとしての役割を担うのは学生となっています。

また教務部門を中心にして、新入生に対して教育の体系の説明や時間割の組み方についての説明も行っています。こうしたオリエンテーションの場にも、先輩学生を招き、自分達の１年間の経験を含めてアドバイザー役を担ってもらっています。

入学後直ちに、学生同士あるいは教職員との連携を深めるための新入生歓迎合宿を行いますが、ここでも学友会・常任委員会はクラブ活動や各局の活動内容をパワーポイントで紹介しています。こうした活動を拡大し、教員とともに教務内容を紹介する際の助言者としての役割を担うまでに高め、学生編集の冊子にまとめたいと考えています。

（ｖ）学内ゴミ・ゼロ運動の推進

大学は事業所であり、家庭でのようなゴミ分別・回収システムが適用されていません。そこで、学生・教職員の意識改革を進め、学内でも松本市の基準を適用し、リサイクルでゴミを無くす運動に全学挙げて取り組みます。新聞紙等の資源物回収は地域の障害児施設に委託し、運営資金面での

支援ができるような対応をとろうとしています。生協との連携で残飯は堆肥化し、循環型社会システムへの移行を考える糸口としようと思っています。

(4) 新たな取組の改善・評価［申請書作成・記入要領Ｐ５参照］

（ａ）どのような体制・方法で評価するか

新しい取組は、短大部の学部長、学科長それに学長（代行）と副学長からなる総務委員会で点検評価されます。各取組を担当する委員会に属する教員や、関係する学生達も含めた会議を開いて成果や問題点が確認され、評価内容が総務委員会に報告されます。

（ｂ）どのような観点について評価するか

本取組みが功を奏しているかどうかの評価は、教員やそれをサポートしている職員の、日常の態度の変化と、それがもたらすと期待される大学の雰囲気の変化に求められます。

それには多くの学生が、多様な活動に参加していることを確認できることが重要です。このことに関連して、コンピュータシステムの実質的な運用がどこまで進展するかもポイントです。全学生からの変化に対する生の声を集め、これもまた報告書にまとめ公表する予定ですが、ここでも学生と協働した取組としての点検・評価活動が展開されます。

（ｃ）評価結果をどのように活用するか

評価結果はＰＤＣＡサイクルに乗せて、次年度の取組に生かしていくのは当然のことです。また一つのブランチでの成功例は、当然他にも普及させる必要があるので、経験を交流するために、各部署合同の会議などを開催しようと考えています。

(5) 新たな取組の実現可能性・将来性［申請書作成・記入要領Ｐ５参照］

（ａ）各年度の運用

大学運営に学生が参画するという方向は、現在の大学改革の流れを推進しようとすれば、必然性を持っているように見えます。学生がどこまで本気になれるか、そうなるための軌道に乗せることが出来るか、１年目はその準備期間であり、試行期間でもあります。

会議については、初年度は意思統一のためのものになり、次年度以降は実施した結果・途中経過を見ながら、成果と問題点を確認する会議になるだろうと思われます。コンピュータシステムの導入については、初年度はデザインを含めてその準備期間と考えています。

個々の事例の進行計画は、資料５に一覧表として示されています。

（ｂ）実施体制の整備状況

どの取組も現在もすでに行われている内容を、視点・意識を変え、新しい要素を取り入れて実施するものになっているだけです。その意味では、具体的な課題の実施体制はすでに出来ているといえます。新しく強化した会議などは総務委員会が担当するので、これもすでに体制は整っていると考えてよいので、残る意識改革に焦点を当てて取り組みたい。

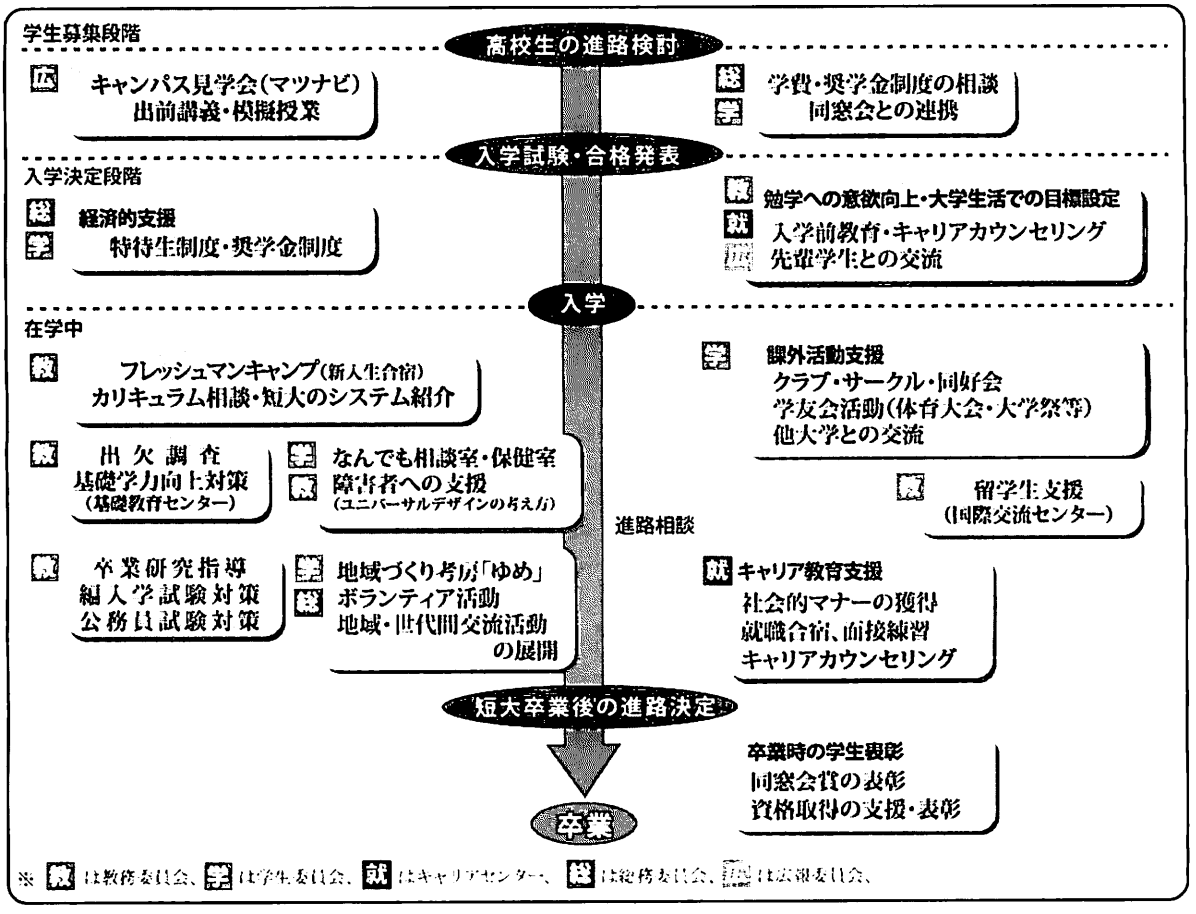
（ｃ）補助期間終了後の展開等

２年間でうまく定着させ、補助期間終了後は松商短大部の新方式として知られるくらいにまで完成度を高めたい。教職員だけの努力では完成できない、困難だけれどもそれだけに魅力的なテーマであり、継続的な挑戦を行うに値する課題だと認識しています。

（様式５）

５　データ、資料等【２ページ以内】［申請書作成・記入要領Ｐ５参照］

資料１．時系列で見た本学の学生支援の取組



資料２．入学前キャリア教育を報じる本学広報誌「蒼穹」第85号

(11)　平成19年3月18日　松本大学学報　第85号

平成一九年度入学予定者を対象に

「入学前キャリア教育」がスタート！

今年も、平成一九年度入学予定者を対象とした「入学前教育」がスタートした。これは、本学キャリア教育の一環として三年前から実施しているものである。

一月一八日に行われた「第一クール・集合ゼミナール」には、平成一九年度から新設される人間健康学部の入学予定者を含む、約四八名がお加。セルフワークで自分の経験や興味を整理し、さらに先輩学生や他の入学予定者たちとの交流を通して、目的意識や大学生活のイメージをふくらませることに取り組んだ。特に、現役松大生が増上に登場し、学業や資格取得、自治会やサークル活動など、それぞれが力を入れて取り組んだエピソードを披露した「先輩学生による入学生活体験報告」は大変好評で、事後アンケートでは九五％以上の参加者が「先輩の話を聞いて、大学生活への意欲が高まった」と答えている。また、同時に行った「グループワーク」でも、教職課程履修の大学二年生がファシリテート役となり、参加者同士のコミュニケーションが活発にはかられていた。「いろいろな人と話した」「他の人の経験や考えを知ることができた」との感想に記して、「未知が拡がってすごい」思った。「自分もあんなようになりたい」という声もあがっており、関わった先輩学生たち一人ひとりが、大学生活のイメージをつくる「セルフ」としての役割を果たしていることもうかがえた。

二月には、今回参加者全員への個別カウンセリングが行われた。カリキュラムや履修説明などを行う三月、四日のプレオリエンテーションをもって、プログラム全てが完了する。

（キャリアセンター・瀬田）

資料３．就職活動を控えた後輩に経験談を語るＯＢ・ＯＧや先輩の現役学生

資料４．
広報委員会とともに活躍する
M@tsu.navi（マツナビ）

長野日報　8月14日

キャンパスナビゲーター

学生自らキャンパスをＰＲ

長野日報
2007.8.14

資料５．新たに展開する取組みの年次計画

カテゴリー	実施項目とその概要	20年度	21年度
交流推進	湘北短大生との交流	○	○
	松本大学を含む県内他大学との交流促進	○	○
ＳＤ活動	職員の資格取得支援（各年次ごとに分割して取得）	○	○
	職員の合宿・会議／講習会	○	○
	教員と職員の連携強化		○
	研修会派遣	○	○
	各種分野からのプロに学ぶ（講演会等）	○	
	ＳＤ報告書の作成		○
	学生カルテ・データ BANK システムの構築	準　備	運　用
学生事業	情報センター：学生スタッフ事業	○	○
	広報関係：マツナビ事業	○	○
	教務関係：新歓・オリエンテーション事業		○
	ゴミ処理・リサイクル推進事業	○	○
	キャリアセンター関係：入学前教育＆体験報告	体験報告	両　方
	キャリアセンター体験談報告集作成	準　備	完　成